

一八八二年八月十三日(日)

ドツキネーシヨル  
南神の寺院に於ける聖ラーマクリシュナと信者たち

ドツキネーシヨル  
南神にて——ケダルの饗宴

ドツキネーシヨル  
南神の寺院で、タクル、聖ラーマクリシュナはケダル等信者たちと共に語り合っておられる。今日は日曜、新月の日である。ベンガル暦二二八九年スラボン月の二十九日、キリスト暦一八八二年八月十三日。時間は午後五時になるところ。

ケダル・チャトジェー氏はハリサハール(ドツキネーシヨル)に家がある。役所で經理の仕事をしている人物で、長い間ダツカに住んでいた。その時分にヴィジヤイ・ゴースワミー氏と共に、いつも聖ラーマクリシュナのことを語り合っていたものである。神様の話になると、彼の目は涙で溢れるのが常だった。以前はブラフマ協会の会員でもあった。

タクルはご自分の部屋の南のベランダで信者たちと共に坐っておられる。ラーム、マノモハン、スレンドラ、ラカル、バヴァナート、校長、その他、何人もの信者たちがそこにいる。ケダルが今日は饗宴(きやうげん)を張っていて、皆が一日中楽しく過ごしているのである。ラームが歌の名手を一人連れてき

て、その人が歌をうたった。歌のときタクールは三昧に入って、部屋の小ベッドに坐っておられた。校長その他の信者たちは、タクールの足もとに坐っていた。

〔サマデー、三昧の原理と全宗教の調和——ヒンドゥー、ムスリム、クリスチャン〕

タクールはお話をなさっているうちに、三昧の原理について教えて下さった。

「サツチダーナンダ（実在・智慧・歡喜—ブラフマンの実体）をつかむと三昧に入る。そのとき、一切の行事は捨てられてしまう。わたしが音楽家の名前を呼んでいるときにその音楽家がここにやって来たとしたら、もうその人の名を呼ぶ必要はないだろう。蜜蜂がブンブンいつてるのはいつまでかね？ 花に止まるまでだ。けれど、修行中のものにとつては、行事を捨てるのはよくないよ。礼拝、称名、瞑想、勤行、祈禱、巡礼、みんなしなくてはいけない。

ソレをつかんだ後でも、何か議論のようなことをしている人があれば、その人はちょうど花の蜜を吸いながら、何となくグングンうなっている蜂のようなものだ」

歌い手は、まことに上手に歌っていた。タクールは大喜びである。彼に向かっておっしゃる。

「何か大きな才能を持っている人、たとえば音楽の方の芸術にすぐれているような——そういう人には、神様の力があるんだよ。特別にね！」

歌手「先生、どんな方法をとれば神にふれることができるのでございませうか」

聖ラーマクリシュナ「信仰が一番。神様はあらゆるもののなかにいらっしやる。それじゃあ、神の

信者とはどういう人のことを言うのかね？ それはね、心がいつも神様のところに在る人のことだ。我執と高慢があっちゃあ、それはできない。ウタシの大きな塊の上には、神の恵みの水は溜らないで流れ落ちてしまう。私<sup>レ</sup>はただの道具なんだ」

それから、ケダルはじめ他の信者たちに向かつて、次のように話された。

「どの道を通つても神様のところへ行ける。どの宗教だつて真実だよ。屋根に上がることが問題なんだ。それには石の階段でも上がれる。木の階段でも上がれる。竹バシゴでも上がれる。それから綱をよじのぼつても上がれるし、竹竿を使つて高跳びしても上がれるわけだ。

ほかの宗教には間違いや迷信があるとかね。そりやそうさ、どの宗教にだつて間違いはあるよ。誰もが自分の時計だけ正しいと思つてゐるんだよ。神様に恋い焦がれる気持ちがあれば、それでいいんだ。あの御方はね、<sup>アンタルヤミシ</sup>内なる案内者なんだよ。

あの御方は、人の心のなかのことは何もかも御承知でね、願ひごとや、憧れてゐることをすべてお見通しだ。一人の父親に大ぜい子供がいるとしよう。年長の子供たちは、お父さんとか、パパとか、はつきり発音して呼ぶ。けれど、小さい子や赤ん坊は、せいぜいタ<sup>ッ</sup>とか、パ<sup>ッ</sup>とか発音するだけで呼んでいる。このタ<sup>ッ</sup>だの、パ<sup>ッ</sup>だのしか言えない子供らのことを、父親は怒るかね？ 父親は、かれらも自分を呼んでいるのであつて、ただうまく発音できないだけだ、ということがわかつてゐるのだ。父親にとつてはどの子も同じさ。

それから、信者たちはあの御方のことを、いろいろな名前で呼んでいる。だが、ひとりの御方を呼んでいるんだよ。ひとつの貯水池に四つの水汲場がある。ヒンドゥー教徒は或る水汲場で水を汲んでジャルといい、イスラム教徒は別な水汲場で汲んでパーニーと呼び、キリスト教徒はまた別な水汲場で汲んでウォーターと呼んでいる。また、ほかの人たちは別なところから汲んでアクアと言っている。

ひとつの神に様々な名前」